

HOKUSEI@COM

2015・MARCH

vol.19

HOKUSEI GAKUEN UNIVERSITY
COMMUNICATION MAGAZINE SPRING EDITION

北星学園大学

北星学園大学短期大学部



02-03

〔特集〕
国際山岳医
大城和恵さん
インタビュー



02-03

社会のために何ができるか。
答えは、山が教えてくれた。

国際山岳医
大城 和恵さん

04-05



〔卒業生は、いま★学生たちの素顔〕

特別企画・親子インタビュー

押し付けをしない指導が、
生徒自身の問題解決力を育てる。

掛屋 忠義さん

自分を律し、仲間と調和する。

選手経験を糧に、

夢は小学生バレーボールの指導者。

掛屋 沙良さん

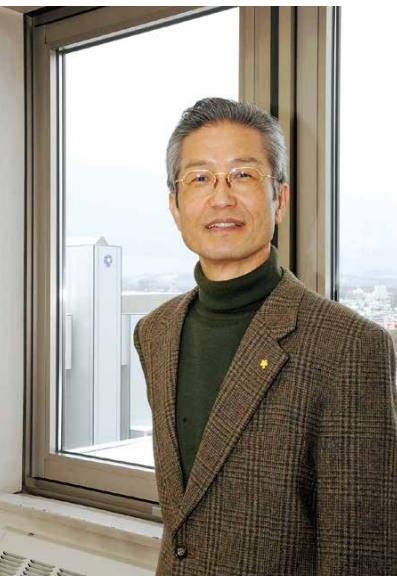
06

〔新しい教育への取り組み〕
短期大学部 英文学科
観光ホスピタリティ教育科目
社会で、世界で求められる
ホスピタリティを学ぶ



07

〔先生たちのその素顔〕
文学部 英文学科
伊藤 章先生
リベラルで寛容な大人として
成熟するために……。



08

〔HOKUSEI INFORMATION〕
北星学園大学からのお知らせ

★この春、北星学園大学・
北星学園大学短期大学部の
キャンパスに
新たなランドマークが誕生します。



国際山岳医という仕事

中島：大城さんは日本人初の「国際山岳医」として知られていますが、資格を取ろうと思ったきっかけは何ですか？

大城：もともと登山が好きで世界の山々に登っていたのですが、ある時ネパールでトレッキング中に高山病の登山者に遭遇。医師としての知識で対処したものの、山岳医療として最善だったのか疑問が残りました。それから「好きな山で医師として役に立ちたい」と思うようになり、当時日本で認定制度がなかった国際山岳医の資格取得を目指してイギリスへ渡りました。

百井：国際山岳医としてどんな仕事をされているのですか？

大城：三浦さんのような登山チームの健康管理、遭難による怪我人や病人のケア、さらに北海道警察の山岳遭難救助アドバイザーとして救助隊への助言を行っています。しかし救急車が入れない山では病院搬送に時間がかかるため、登山者自身が自助能力を身につけたり、遭難事故を減らすために、登山者自身が予防することが大切。そこで実際に山を登って登山者に呼びかけたり、脱水予防用の水を配るなどの啓発活動も行っています。北海道は登山愛好家が多いせいか、山の安全意識が高いように感じます。最近は私の勤務先にある「登山外来」を受診される方もずいぶん増え、うれしく思っています。「山の日」の祝日も制定され、登山が日本の文化として定着しつつある昨今、国際山岳医の立場で登山者の安全意識の啓発に努め、遭難事故をひとつでも減らしていければと思っています。



著書紹介

『三浦雄一郎の肉体と心 80歳でエベレストに登る7つの秘密』（大城和恵／講談社+α新書）
80歳でエベレスト登頂を達成した三浦雄一郎氏の体と心を同行医の視点で徹底分析。「人生」「食」「家族」など7つのテーマに基づいて三浦氏の生身の姿を軽妙なタッチで綴るとともに、人間の肉体と精神の可能性について言及した一冊です。

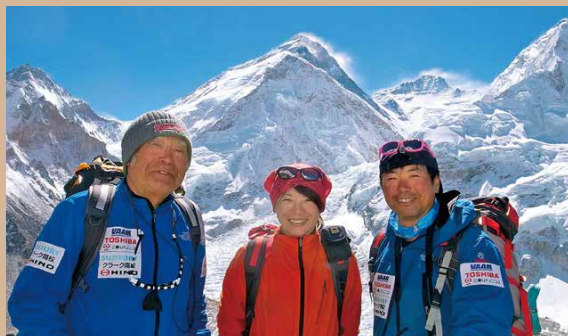


好きなことで人の役に立つ喜び

中島：私たちはこの春社会人になりますが、仕事に取り組む上でアドバイスをお願いします。

大城：私は幼い頃から「人の役に立つ仕事がしたい」と思って医学部を志し、全身をトータルに診察する医師を目指して医療の道に入りました。それから臨床経験を重ね、現在は非常勤医として循環器科と救急診療を担当する傍ら、山岳医として登山に関する疾患や外傷を勉強しています。結果的に全身を診る医療に近い仕事にたどり着き、山岳医として大好きな山に関わることができる今、とても幸せだと感じています。それは、やりたいうことができて、そういう環境をつくることができ、人に恵まれているからです。やりたくない仕事が回ってくることももちろんありましたが、目の前のことに一生懸命取り組んでいると必ず発見や学びがあり、自分のためになっていました。その積み重ねの中で、自分がやりたいこと、自分にあっていることを模索し、自分の歩む道がようやく形作られてきたと思います。若い時には、こんな未来があるとは思っていませんでした。皆さんも、様々な積み重ねの中で、自分の適性を見極め、素晴らしい自分の資質を生かしてください。「みんなにとっていいことをしよう」これが、私の好きな考え方です。みんなのためになる仕事ができれば、必ず次の世代につながります。

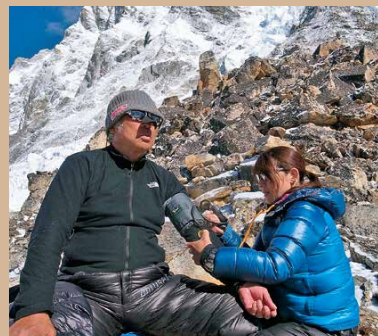
中島・百井：本日はありがとうございました。



左から：三浦雄一郎氏、大城先生、三浦さんの次男・豪太氏。
ヒマラヤ山脈のブモリ峰で高度順応中、エベレストをバックに笑顔を見せる3人。



頂上から下山の最中に、三浦さんの体調について無線連絡を受ける大城先生。



ブモリ峰で高度順応中に青空血圧測定する大城先生。
エベレスト登頂に向けてチーム三浦の体調管理を徹底していました。

INTERVIEW

「卒業生は、いま★学生たちの素顔」 特別企画・親子インタビュー

今年で創立129年目を迎える学校法人北星学園。その長い歴史の中では「親子そろって北星出身」というご家族も少なくありません。今回ご登場の掛屋さん親子も同じ学部・学科で学び、ともにバレーボールの世界で生きる似たもの親子。久しぶりの父と娘の2ショットに少々照れながら、それぞれの学生時代やバレーボールのこと、普段口にするものない互いへの思いを語ってくれました。



押し付けをしない指導が、 生徒自身の問題解決力を育てる。

かけ や ただ よし
掛屋 忠義 さん

札幌大谷高等学校 教諭／女子バレーボール部顧問・監督
1976年北星学園大学 経済学部 経済学科卒業

指導のあり方に悩んだ青年時代

高校時代、女子バレーボール部のマネージャーを務めたのがきっかけで指導者を志すようになりました。北星学園大学では社会科教員を目指して勉強しながら、学内の歌声サークルにも入り、楽しい大学生活を過ごしたのも懐かしい思い出です。その一方で、放課後は他大学バレーボール部でコーチの修業をし、卒業後、道内高校の女子バレーボール部監督に就任。全国レベルの強豪校に育てあげたものの、バレーボール一辺倒の高校生活を部員に強いるスパルタ指導に自責の念を抱き始め、退職しました。

運動能力・知力・人間力を育てる指導へ

その後、縁あって札幌大谷高校に赴任。再び女子バレーボール部の指導を始めてからは、勝つためのバレーボールを押し付けるのではなく、一人ひとりを信頼し、運動能力・知力・人間力を最大限に引き出す指導を心がけてきました。指導者のやり方に従うだけでは、ピンチの場面に立たされた際に自分たちで解決する力が育たない。でも一人ひとりが運動能力・知力・人間力を発

揮できれば、自分たちで解決策を見つけることができる。ピンチの時でも「負けたらどうしよう」ではなく、「こうすれば勝てる」と前向きな思考に切り替えることができるのです。つまり、自分の力で物事を解決する力を養うことが大切で、これは社会に出てからも大いに役立つことになります。時間はかかりましたが、いま札幌大谷高校は全国大会に出場する強豪校へと成長を遂げました。

人間として成長していく姿を 指導者として見守る喜び

指導者としてうれしいのは、部員一人ひとりがバレーボールを通して人間的に成長し、卒業後も小・中学校教員として同じ指導者の道を歩んだり、何らかの形でバレーボールを続けてくれていること。娘も北星学園大学に進学し、大学で学ぶ醍醐味とともにバレーボール部キャプテンとして喜びや苦しみも味わい、人間として成長してくれたことをうれしく思います。教員として指導に携われるのもあと数年。一人でも多くの生徒の成長を見届けるとともに、いずれは中学・高校だけではなく、大学を含め一貫指導で強いチームを育ててみたいと思っています。



札幌大谷高校女子バレーボール部で部員を集めて指導中。



大学在学中、本学1号館(当時)の前で。



沙良さん3歳の七五三を祝い、父娘で記念撮影。



自分を律し、仲間と調和する。選手経験を糧に、夢は小学生バレーボールの指導者。

かけ や さ ら
掛屋 沙良 さん
北星学園大学 経済学部 経済学科 4 年
(札幌大谷高等学校出身)

バレーボールに打ち込み、悩みながら学んだこと

父はバレーボールの指導者、母はママさんバレーボールの選手という環境で育ち、私も小学4年生からバレーボールを始めました。高校時代はバレーボール部監督である父の指導を受けた時期もありましたが、バレーボールだけでなく生活面や学習面でも厳しく指導され、自律性を養ってきたことは今でも大きな自信になっています。高校のクラブ活動とは違い、大学ではバレーボールに対する考え方はさまざまで、「趣味や交流の一環として楽しみたい」という人も多く、キャプテンになってからは他の部員との意識のズレに苦しんだことも。時々父に話を聞いてもらい、仲間に助けられながら、リーダーシップやチームワークを肌で学んでいったように思います。

スポーツや芸術と経済・社会との関わりを研究

キャプテンとして味わった苦い経験は、今まで「勝つバレーボール」だけを追求してきた私に、コミュニケーションを大切にしないとチームそのものが成り立たないということを教えてくれました。若い頃の父も指導者として悩んだ

時期があったと知り、ちょっと親しみを感じています。父の母校である北星学園大学に進学したのも、父の影響が少なくありません。「自由でやりたいことができる大学」という父の言葉どおり、バレーボールだけでなく興味のある学問分野をとことん学ぶことができた4年間でした。スポーツや芸術と経済・社会との関わりをテーマに、ゼミの一環で音楽イベントの運営に携われたのも貴重な経験です。

夢は小学生バレーボールの指導者 一生バレーボールと関わりたい

大学卒業後は札幌市内の社会人チームに所属してバレーボールを続けていく予定です。全国優勝している強豪チームなので今からワクワクしています。今後は選手として実績を積み、いつか小学生のバレーボールチームの指導者になるのが夢。私自身も小学生でバレーボールに出会い、今ではバレーボールのない生活が考えられないほど大切な存在になっています。子どもたちにもバレーボールの楽しさ、バレーボールを通して成長する手応えを伝えていけたらうれしいですね。



キャプテンとして悩みながらも日々練習に打ち込んだ大学時代。



苦楽をともにした仲間との絆は社会人になっても変わらないはず。(最前列中央：掛屋沙良さん)

新しい教育への 取り組み

社会で、世界で求められるホスピタリティを学ぶ
短期大学部 英文学科
観光ホスピタリティ教育科目



昨年研修を行った香港国際空港で、お世話になった職員の方々とともに。

「英語力を活かして航空業界や観光業界などで働きたい」——そんな学生の声に応じて北星学園大学短期大学部英文学科では、2011年よりホスピタリティに焦点をあてた3つの観光ホスピタリティ教育科目をスタートしました。開講から4年間にわたり学生の指導とサポートに当たってきた森越京子教授に、取り組みの内容と成果について語っていただきました。

高い英語力と気配りの心で、 世界に通用するおもてなしを。



北星学園大学短期大学部 英文学科
もり こし 京子 教授
森越 京子教授

英文学科にはホテルや航空会社、旅行会社などのホスピタリティ関連企業への就職を希望する学生が数多くいます。また、北海道を訪れる外国人観光客も年々増えており、英語力に秀でた人材が求められています。本学科独自の観光ホスピタリティ教育科目は、こうした学生および社会のニーズからスタートしました。

1年次にはホスピタリティ・観光業界のスペシャリストによる総合講義と、ニセコでのインターンシップを実施。2年次には本学科主催の国際観光セミナーを開催し、広報から翻訳資料作成、会場準備、司会進行、外国人ゲストのアテンドまで、すべて学生の手で行います。さらに希望者には海外インターンシップのチャンスも。一昨年はマレーシア航空、昨年は香港国際空港で研修が行われ、参加した学生はグローバルな環境の中でホスピタリティを学ぶとともに、英語はもちろん第二外国語の必要性も実感したようです。

年を追うごとに企業とのネットワークも広がり、ホスピタリティ産業や外資系企業の採用も増えてきました。2020年には東京オリンピックも控えており、これから英語力と気配りの心を備えた学生の育成にますます力を入れていきたいと思っています。

「観光ホスピタリティ教育科目を受講して」

実践的なマナーや広い視野を学び、
志望の職種で内定を獲得しました。



北星学園大学短期大学部
英文学科2年
とよさわ りつかに
豊澤 綾香さん
(千歳高等学校出身)

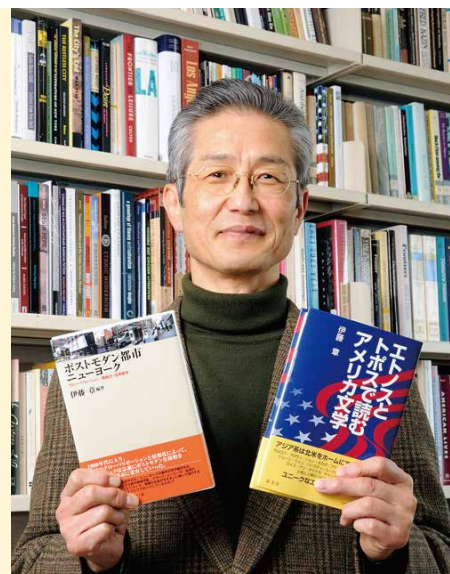
航空業界に興味があり、マレーシア航空のインターンシップに参加したり「総合ホスピタリティ」を受講。航空会社の現役社員の方から、面接に活かせる挨拶や立ち居振る舞い、敬語の使い方などを指導していただいたほか、他業界の方々のお話も聞くことができ、視野が大きく広がりました。ハードな業務というイメージを抱いていたホテル業界も、じつは英語を使う機会がたくさんあってやりがいがあると知り、就職活動の可能性を広げることもできました。春からは希望していた空港グランドスタッフとして、社会人の第一歩を踏み出します。

Featured Faculty Member

先生たちのその素顔

●文学部 英文学科 伊藤 章先生●

リベラルで寛容な大人として
成熟するために……。



PROFILE

いとう あきら
伊藤 章

1948年福島県相馬市生まれ。1975年北海道大学大学院文学研究科博士課程を満期退学後、文学部助手、講師、助教授、言語文化部・国際広報メディア研究科・教育学研究科教授を経て、2007年退職(北海道大学名誉教授)。同年4月より本学教授、2010年度から2年間、文学部長、大学院文学研究科長、図書館長。

〈主な著書〉

- 『エトノスとトポスで読むアメリカ文学』(英宝社、2012年／単著)
- 『ポストモダン都市ニューヨーク——グローバリゼーション・情報化・世界都市』(松柏社、2001年／編著)
- 『アメリカ文学ミレニアム』(南雲堂、2001年／共著)

文学少年長じて、米文学研究者へ

読書が何よりの趣味であった文学少年が長じて、アメリカ文学研究者になったということでしょう。なぜアメリカ文学か。いま思えば、アメリカ文学が他の地域の文学にはない新しさとユニークさを備えていたからでしょうね。たとえば、伝統に囚われない旺盛な実験精神とか、人間とは何か、アメリカで生きるとはどういうことか、青臭いまでに問いつけるところ、移民文学に顕著な、同化と引き換えにルーツを失うことの悲哀というテーマ、宇宙とひとり敢然と対峙するヒーロー像、そういったものに魅かれてきたような気がします。最近では、ニューヨークとロサンゼルス都市小説、カリフォルニアとハワイのローカル文学、アジア系をはじめとするエスニック文学などについて論じてきました。いまは『アメリカ演劇とその伝統』という書物を執筆中です。

冒険としての読書行為

講義科目ではアメリカ文化概論とアメリカ文学史を担当しています。前者はアメリカのエスニック・マイノリティを中心に、多民族国家アメリカの歴史を振り返り、課題を整理しようとするもの。後者では「ビュリティズム」と「フロンティア」「アメリカの夢と悪夢」をテーマに、アメリカ文学を古いところから新しいところまで解説しています。基礎演習と専門演習で重点を置いていることは、第1に英語のテキストを正確に読む力、第2にそれを要約する力、第3にその意味と意義について論ずる力、第4にレポートと論文を書く力です。最近は読む力が足りない学生が多いので、とにかく文学テキストを精密に読む、すなわち言語的、文法的な知識はもとより、作者の伝記的な知識、テキストの背景にある社会的、文化的、歴史的状況に関する知識、そして一番大事な想像力を結集して、緻密に、かつ大胆に読むという作業を大事にしています。名作を読むことが、いかにエキサイティングなことか体感してもらいたいです。

読書によって自己を知り、世界を知る

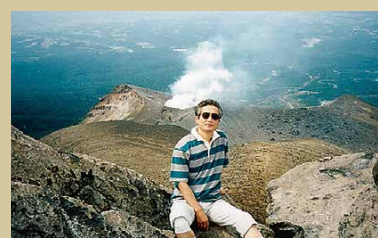
文部科学省の有識者会議ではいま、基幹大学は別として、地方の大学は社会にすぐ役立つ、職業訓練校的、専門学校的なものに再編する案が議論されはじめています。地方の大学は、学問の府である必要はないという議論です。しかし、大学はそもそも、有用性や生産性、効率性などを重視する社会から一時的に距離を置いて、古典や名著に没頭できる場であったはず。読書を通して人は自分を知り、世界を知り、物事をじっくり考えられるようになるのですから、大学は学生たちに読書を習慣づけ、彼らをリベラルで寛容な、絶望しない精神を備えた大人に成熟させる場として踏み留まらなければなりません。



近著『エトノスとトポスで読むアメリカ文学』ほか編著多数。



かつてゼミ生と一緒に記念撮影した一枚。和やかなゼミの雰囲気は昔も今も変わりません。



読書以外の趣味は、40年来の登山(十勝岳山頂にて)。



TOPICS

この春、北星学園大学・北星学園大学短期大学部のキャンパスに
新たなランドマークが誕生します。



■ 学びと交流の新たな拠点「新C館」

2015年3月、かねてより工事を行っていた北星学園大学・北星学園大学短期大学部の新C館がついに完成しました。建築にあたり大学校舎全体の耐震化をはかるとともに、快適な学生生活をサポートする空間設計や最新の教育設備、環境や省エネへの細やかな配慮も取り入れ、大学教育の拠点としてはもちろん地域交流や生涯学習の場としても、役立てるものと期待しています。

新C館はキャンパス内のメインアプローチに面した地上7階地下1階建て、現代的な印象のメタリックな外観は、伝統あるキャンパスの風景にも調和しています。バリアフリーに配慮した総床面積7,488㎡のゆとりある校舎内には、2階まで吹き抜ける開放感あふれるホワイエ（エントランスホール）と500人収容の講堂を新たに設置。授業だけでなく就職支援プログラムや公開講座、大学祭、学会、学生たちの情報交換の場、地域交流や国際交流の場として、多目的な活用が期待されます。

■ 最新の教育設備と省エネ設備を導入

4階から7階はアクティブラーニング（参加型授業形式）に対応した最新のデジタルAV機器を備え、ゼミ室を含むすべての教室にプロジェクターを設置。一方的な講義形式ではなく、学生自身が課題を見つけ、解決し、プレゼンテーションするという新しい学びのスタイルを確立していきます。さらに講堂・ホワイエ・ラウンジ・教室（6・7階）には無線LANを導入し、ネットワークを活用した効率的な授業を展開していきます。

また、新C館とA館の接続部にはガラス張りのカーテンウォールを施し、大学にふさわしい開放的なラウンジを設けました。さらに、環境と省エネにも配慮して、すべての照明にLEDを採用するとともに、都市ガスエネルギーシステムを導入。電力利用の抑制に努めているほか、トイレの洗浄水に地下水を利用することで節水にも貢献します。なお、災害時には自家発電装置により48時間以上自立可能な建物となっています。

■ センター棟の改修と外構整備

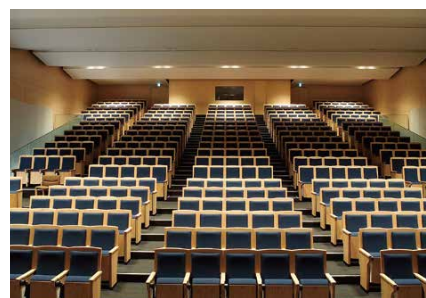
今後の整備計画として、センター棟を改修し、ラーニングコモンズ（学生の自発的な学修を支援する場）や国際交流ラウンジ、カフェなどのコミュニケーションスペースを開設する予定です。また、安心・安全なキャンパスづくりの一環としてサイクリングロード周辺の環境に配慮しつつ、大学敷地を改修する工事を実施します。工事にあたりましては、通行する市民の皆様にご不便、ご迷惑をおかけいたしますが、ご協力をお願いいたします。

開放感あふれるホワイエ



大学の新しい顔となる吹き抜けるエントランスホール。壁面に65インチのデジタルサイネージ（電子掲示板）を5台設置し、学部ごとの講義関連情報や公開講座などの各種イベント情報がタイムリーに表示されます。

多目的な活用が期待される講堂



500人収容の講堂は授業だけでなく学内イベントや各種交流など多彩な活動に対応可能。北海道を代表する家具メーカー「カンディハウス」社製の椅子を採用し、快適な学びをサポートします。

充実した授業をサポートする大・中講義室



教室などには無線LANを導入。ネットワークを活用した多彩な授業が知的な好奇心を刺激し、学びのモチベーションを高めます。